



月刊 名大文学部

第 59 号

発行：名古屋大学文学部
広報体制委員会
koho@lit.nagoya-u.ac.jp

教員コラム—No.58

自国の負の過去とどう向き合うか—ドイツの市民社会の取り組み—

安川 晴基 (ドイツ文学)

冬のドイツの街角です。場所はベルリンの中心部、デパートやブティックが並ぶフリードリヒ通り。雪の積もった路上にプレートらしきものがあるのがわかりますか？近づいて見ると、真鍮製のブロックが三個はめ込まれています。表にはドイツ語が。右は「ここでシャルロッテ・クレーナーが働いていた／旧姓ライヒトマン／1882 年生／辱められ／市民権を奪われ／死に逃れた／1943 年 1 月 31 日没」。真ん中は「ここでメタ・クレーナーが働いていた／1905 年生／1943 年強制移送／アウシュヴィッツで殺害」。左は「ここでアルトゥーア・クレーナーが働いていた／1874 年生／辱められ／市民権を奪われ／死に逃れた／1943 年 4 月 2 日没」。これはナチ時代に迫害されたユダヤ系市民の名を刻んだものです。「躓きの石」と呼ばれ、ドイツの芸術家グンター・デムニヒが始めたプロジェクトです。犠牲者が生前に暮らしていた建物の前にあります。一人の犠牲者にひとつ。それぞれの死の状況が簡潔に記されています。この三人は家族で、ここで商店を営んでいたのでしょうか。なぜ娘だけ移送され両親は自ら命を絶ったのでしょうか。想いがめぐります。ナチスの犯罪が本や映画の中の話ではなく、いま自分が立っている「ここ」で行なわれていたということ。それに気づいた驚きとともに顔を上げると、いつもの街並みが別の色を帯びています。



「躓きの石」はドイツのあちこちにあります。このプロジェクトの特徴は市民が自発的に支えていることです。ある通りや建物にいま暮らしている人々が、かつての住人の運命を調べ、費用を出し合い、依頼します。するとデムニヒがやってきてブロックを埋め込みます。ドイツの人々が自前で、しかも身近な生活の場で、かつてナチス・ドイツが犯した罪を自分たちの問題として受けとめ、犠牲者を悼もうとする草の根の想起の運動です。

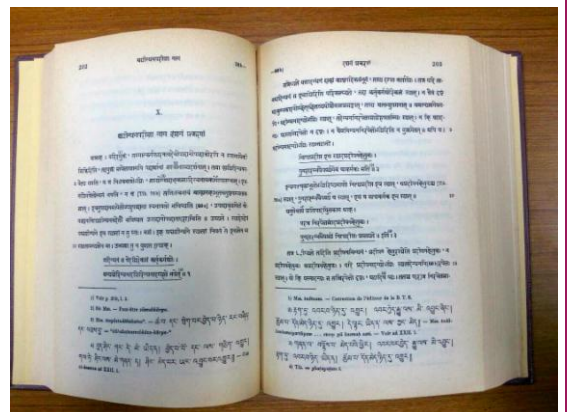
学生たちの研究生活—File2

インドの「空」の心を探る

研究室名：インド文化学研究室

わたしの研究の目的は、インド大乘仏教の論理的側面を大成したナーガールジュナ(龍樹 150-250 頃)の主著『中論』に対するインドの註釈を通じて、諸註釈のインド仏教史における位置付けることにある。

彼が確立した学派は中観派と呼ばれ、インド仏教の主要な学派の一つとして広く知られている。『中論』の主張は「すべては、固定的な本質に基づいて存在しているのではない」ということである。これは「空の思想」といわれ、『般若心経』にある「色即是空 空即是色」の「空」である。



『中論』に対しては多くの註釈が著された。ブッダパーリタ（仏護 370-450 頃）とチャンドラキールティ（月称 600-650 頃）は、背理法によってナーガールジュナの主張を強調した。一方、パーヴィヴェーカ（清弁 490-570 頃）は、当時インドで確立された論理学に基づいて積極的に「空」の思想を論証しようとした。

従前の研究では、前の二者は一括りに論じられ、相異点については問題視されてこなかった。しかし、わたしは両者の背理法には明確な相異が存在すると考える。このことを、2011年に中国チベット自治区から発見された新たなテキストを比較検討し、修士論文で論じた。

『中論』の研究には、サンスクリット語、チベット語の習得が必須であり、論理学などの知識も必要である。いずれも習得には時間がかかり大変ではある。この書を原典から学ぶことは、日本仏教の伝統的解釈とは別の視点をわれわれに与え、インド仏教の実像を直接教示してくれるのである。

[矢崎 長潤（博士前期2年）]

学生たちの研究生生活—File3

バングラデシュ農村におけるフィールドワーク

研究室名：地理学研究室

私はバングラデシュの農村でフィールドワークをしています。フィールドワークというものに、馴染みのない方も多いかもかもしれません。フィールドワークと一口に言っても様々なタイプのものがありますが、基本にはフィールド（現場）で起こっていることを実際に見聞きし、そこから知見を得ることです。私は比較的長い期間フィールドに住み、その地域の言語やマナーなども含め、様々なことを時間をかけて学んでいます。そのため、私が博士前期課程に進学して5年近くがたちましたが、合計2年間近くをフィールドワークに費やしてきました。



もちろん、フィールドワークは研究のためにおこなっているのですが、私がフィールドに長くいたいと思えるのは、あたたかく迎えてくださる住民の方々のおかげです。他の国でも同じようなことが指摘されていますが、バングラデシュの方々の間では歓待（もてなし）の精神がとても強く見られます。歓待は通常、自分から社会的、物理的に遠ければ遠い人に対してほど、たとえば身近に住む親戚よりも、突然訪ねてきた遠縁の人に対して豪華になされていました。私も初めて訪ねたところでは、遠くからやってきた客人の1人として、しばしば歓待の対象となります。なかでも、私が学部を卒業して間もないときに、簡易テントに暮らす行商集団のお年寄りの女性が私の手を取りながら、「明日はごちそうするので、来てください」と言ってくださったことを今でも印象深く覚えています。彼女を含め、住民の方々からは、遠くからの客人の来訪という非日常を喜ぶ率直な気持ちが伝わってきます。私が再訪するたびに喜んでくれる住民の方々が、私の気持ちを研究へ、足をフィールドへと向かせ続けてくれるのです。

[杉江 あい（博士後期2年）]

最近の文学部

卒業式

学部や大学院の入学試験も終了し、文学部にはつかの間の静けさが訪れています。本学を受験された皆様には、4月にお会いできることを心よりお祈り申し上げます。大学はもうすぐ卒業式。普段はカジュアルな恰好で構内をうろうろしている学生も、この日ばかりは着飾って、華やかなキャンパスになります。（K記）